
俺の僕はミノタウロス

kiki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の僕はミノタウロス

【Nコード】

N0901Y

【作者名】

k i k i

【あらすじ】

主人公、天道寺信也は召喚獣をペットにしたいため、黒魔術を使い、魔獣ミノタウロスを召喚しようとした。しかし、召喚されたのは何ともかわいらしい角が生えた幼女だった。

一話 【ミノコ召喚】

とある学生寮の六畳ほどの大きさがある一室、布で書かれた魔法陣の上で俺はこれから起こる事に胸を弾ませていた。魔法陣の上には五つの道具が円を描くように並んで置いてある。

「さあ！ 異界の魔獣ミノタウロスよ！ 我の僕として召喚せよ！」
深夜、カーテンを閉め切っている中、魔方陣が光り出す。青白い光の玉が蒸気のようにあふれ出ている。

「はははっ！ 我は漆黒の魔術士！ 天道寺^{てんどうじ} 信也^{しんや}なりー！」
カメラのフラッシュのような強い光が部屋を覆う。異界の門が開いたのだ。瞬間的に目が眩んだが、そのフラッシュは一時的なもので、部屋は元の暗い状態に戻っていった。

五つの道具が無くなった代わりに、魔方陣に転がる全裸の女の子。活発さを思わせるツンツンなショートヘアに、小さい角が右耳と左耳の上に一本生えているのが目に付く。首には首輪がついている。

「あれ？」

俺は呆気にとられた。

格好いい魔獣を呼んだはずなのに、何だ、このかわいいのは。
「むにやむにや」

女の子は目をこすりながら虚ろな目で俺を見た。

「お前が私を呼び出したのか？」

「いや。お前など知らん」

「嘘をつくな。変人が」

「なんだとっ！ この俺のどこが変人なんだ！ え？」

黒魔術士のコスプレ姿に魔法の杖を持っている俺は言った。いたって正常だろ？

「このコスプレの衣装、高かったんだぞ！」

「何言っているのかわからない。とりあえず死ね」

「俺は死なん。不死身の存在だ」

女の子の冷たい視線が俺に突き刺さるが、そんな事、俺には屁でもない。

「おい、お前。名前は？」

「……ミノコ」

彼女はお腹に手を当てた。グウウと情けない音が鳴る。

「腹減った。何か食わせろ」

「今は何も無い。朝まで我慢しろ」

「わかった。朝になったら食わしてくれろんだな？」

「ああ」

ミノコは納得したのか、そのままごろんと横になった。俺はそのままだと風邪をひくと思い、ふとんをかけてやった。

こいつ、襲ってきやしないだろうな。俺は一抹の不安を感じつつパジャマに着替え、ベッドに横になった。

朝はいつも決まって、ある時間帯に目が覚める。俺の特技の一つだ。

よろつと起き上がり横に目をやると、ふとんを蹴飛ばして横向きに寝ている全裸のミノコの姿があった。

ふん。ちつとも嬉しくない。俺は熟女で、しかも巨乳が好きなんだ。こんなペチャパイで、幼い容姿の獣人、許容範囲外なのだよ。

さて、このミノコとやらをどう処理しようか。魔獣を呼び出して俺のペットとする計画がこんな形で幕を閉じるとは。また、儀式のための道具を探さなければいけないじゃないか。面倒くさい。

俺はカーテンを開け、日の光を部屋に入れた。

「ミノコ。起きろ」

「うっん」

ミノコはゴロンと仰向けになり、絶壁の胸を恥ずかしげもなくさらけ出す。まじまじと見てみると、まだ成長段階だなあと感じる。これが大きくなるのはまだまだ時間がかかるな。

「どこ見てるんだよ」

ミノコは薄目を開いている。起きていたのか。

「お前のおっぱい」

「死ぬか？」

「俺は死なんと言っただろ？」

その問いに答える気はないのか、ふとんを手繰り寄せ、胸の部分を隠す。こいつにも羞恥心というのはあるらしい。

「……ふむ。しかし、その状態で外に出るのは色々危険だな」

「ていうか、私を元の世界に帰らせてよ」

「それはできん」

「なんでよ？」

「面倒だから」

「やっぱり殺そう」

ミノコは角をこちらに向けて、威嚇している。俺はさすがに危機を感じ、後ずさり。

「待て。話し合おうじゃないか。平和的な解決を俺は望んでいる」

「……話だけは聞こうじゃない」

一旦、威嚇体勢を解くと、むすっとした顔で俺を睨む。

「今日からお前は俺の僕として生きていくのだ。わかったか？」

「わからない」

「そうか。まあ、聞け。お前を元の世界に返すのは儀式をしなければいけない。その儀式を行うためには道具が必要だ。その道具が手に入るまでは、という期間限定だ」

「へえ」

「だから、一緒に探そうぜ」

「やだ。お前、一回集めたんだろ？ だったら私が手伝う必要はない」

「二人でやれば、その分早く帰れるぞ。お前にとっても有意義だろうが」

ミノコは怖い顔で俯いた。しばしの沈黙。窓の外では小鳥たちが何かお喋りをしている。

俺は椅子にどかつと座り、机に貼ってある今日の時間割をまじまじと見ていた。

今日は最悪な事に体育がある。なぜ、この俺がぜえぜえと体を動かす必要があるのだ。

「わかった。探す」

「そうか。じゃあ準備しないとな」

「ん？」

俺は椅子から立ち上がり、傍の洋服ダンスを開ける。

「ほれ」

ワイシャツとズボンをミノコに放り投げた。それが顔に覆い被さる。

「ぶっはあ。何をする！」

「着ろ。その格好で外に出ると捕まるぞ。それはそれで面白いがな」

「どこに行くんだ？」

「食堂でご飯を食べる。それから学校」

「ご飯！ ご飯！」

ミノコはよほど腹が減っているのか嬉しそうに連呼している。

俺は再び椅子に座ると、本棚から黒魔術の本を取り出した。本を捲り、召喚獣を異界に戻すための儀式、それに必要な道具一覧を見つけ、手帳にメモした。それが終わると頬杖についてミノコが着替え終わるまで待っていた。しかし、後でバタバタと荒々しい音が聞こえるのが気になり、振り返ってみる。

「何やってるんだ？ お前」

そこには一生懸命、服と格闘しているミノコの姿があった。

「むにゃー！」

びりりつと乾いた音が鳴った。ワイシャツが縦に二分割される。

「お前！ 何してくれてんの！？」

「もつと着易い服をくれよ」

着易い服って、そんなものないぞ。

ていうか、ごめんなさいの一つも言えないのか。こいつは。

「あれ、くれ」

ミノコは部屋にかけてある魔法少女のコスプレ衣装を指差した。
俺に女装趣味はないが、コスプレ仲間から貰ったものだ。魔法少女
キューティクルって言ったっけ？ 空から突然魔法少女が落ちてき
て、主人公に色々なトラブルを起こす的なストーリーの漫画だった
な。

「だめだ。あれは着て、外を出歩くためのものじゃ——」

と言っている間に、ミノコは鉄砲玉のように素早くその服を手
取り、そしてこう言い放った。

「着るの手伝えよ」

学生寮の食堂で皆の奇異の目が集中する。

そりゃそうだ。隣で魔法少女キューティクルの衣装を身に纏い、
不釣り合いな大きな帽子をかぶった幼女が大盛りのご飯を手でかき
集めながら食っているのだから。

帽子をかぶせたのは、角を隠すためだが、何をしても目立つ事こ
の上ないな。

せめて箸を使え。箸を。

俺達は逃げるように食堂から出て、部屋に戻った。

うつむ。この格好はさすがにまずいな。

そう思いながら学校の制服に着替え始めた。

「学校に儀式のための道具があるのか？」

「ああ。まあな」

素早く着替え終わった俺はカバンを持ち、ドアを開けた。

「この頭のやつ。邪魔だけど脱いでいいか？」

「ダメだ」

寮を出ると、徒歩十分ぐらいで学校にたどり着く。ここに来ても
う一年近く経つが、この十分も面倒くさく感じるのは、その道が登
って下ってを繰り返す起伏のある山道だからだ。まるでこれから登

山をするような感覚だ。

ミノコは珍しいのか、後の方で立ち止り、しゃがんで草に止まっている虫を見つめている。

「おい。さっさと来い。魔法少女」

なかなかついて来ないミノコに痺れを切らした俺は振り返って言った。

「ミノコだ」

「どっちでもいいだろ。まったく」

ミノコは膨れっ面をし、歩き出した俺の後について来た。近くまで来るとしばらくして口を開いた。

「…そう言えば、お前の名前、聞いてなかったな」

「俺の名前。ふふふ。聞いて驚くなよ」

「変人で十分だ」

「天道寺信也だ。変人と呼ぶな」

「じゃあ私も魔法少女と呼ぶな」

ふん。まったく生意気なガキだ。俺は返事もせず、山道を進んでいった。

二話 【辞書Ⅱ凶器】

短い登山を終えると三階建ての校舎が見えてきた。ぞろぞろと同じ学校の生徒が玄関を目指し歩いている。男子、女子ともに青みを帯びた黒のブレザー姿で、男子の場合、普通はネクタイをするのだが、強制ではないため俺はしていない。女子は首元に小さく可愛らしいリボンが添え付けられている。

「これが学校か！ おっきいな」

はしゃぐミノコを横目に、さすがにこのままこいつを教室に入れるのはまずいと思った。俺は体育館横の倉庫に行き、ミノコに「そこから出てくるなよ」と念を押した。ミノコは何か言ったようだが、俺は無視し、玄関の方へと向かった。階段を上って二階の教室へと入っていく。

俺の席は後の方の窓際で、日当たりが良い。ここからグラウンドを眺める事が出来るが、巨乳の女子が走る姿ぐらいしか特に見るものはない。隣には一条とかいう眼鏡野郎がちらつと俺を見たかと思うと、持っている本に目を戻し、いかにも読書に集中してますよと言わんばかりの素振りを見せてやがる。

エロ本でもあるまいし、何をそんなに一生懸命見ているんだか。やがて一時限目開始のチャイムが鳴った。扉がガラツと開き、担任の先生が入ってきた。続いて、ミノコが入ってきた……って！

「お前！ 何やってるんだよ！」

「あ。いた！」

俺を指差しながら近づいてくる。そして第一声。

「突然倉庫に押し込めるなんてひどいぞ！」

「え？ お前、馬鹿。何誤解を受けるような事言ってるんだ！」
教室皆の視線が俺とミノコに降り注ぎ、そして俺だけに突き刺さる。

「おいおい。何だあれは？ コスプレか？」

「あの子。かわいくない？」

ザワザワし始めた教室。先生は教壇に立つと俺の方を向いて言った。

「一時限目は自習だ。それと、天道寺。職員室に来い」

「……はい」

「何？ 森で偶然出会っただ？」

「はい。扇先生あふん。俺も付きまとわれて困ってるんです。森の妖精が何かですかね？」

何で朝から職員室で四十後半のおっさん相手に言い訳しなきゃならんだ。職員室は一時限目が始まっているからだろ。いるのは奥で偉そうに座っているハゲ教頭と俺、扇先生だけだ。

「森の妖精って、お前……。まあいい。とりあえず、警察を呼ぶぞ」

それは色々な意味でまずい。幸いな事に先生はミノコが召喚した魔獣だと気づいていない。あの容姿が吉と出たか。

「待つてください」

「何だ？」

「正直に話しましょう。彼女は俺の妹です」

「は？」

その後、俺は即興で考えた嘘に熱弁を振るう。彼女は家庭の事情で、とある資産家の養女として引き取られた妹である事。家主から暴行を受け、家を飛び出し、俺を頼ってここまで来た事などの経緯を語り、辻褄が合わない所は勢いで誤魔化した。そして、最後は「俺に任せてください」と胸を張って言い切った。

「そうか……。わかった。しかし、任せて大丈夫だろうな？」

「はい。何とかしてみせます」

先生はわざとらしく、ふうつと溜息をついた。

「困った事があつたら、いつでも相談してくれ」

やなこった。俺は心の中でベロツと舌を出し、職員室を出た。

教室に近づくにつれ、授業中なのにザワザワと一際賑わう声が聞こえてくる。

——俺のクラスだ。

クラスの連中は俺が戻って来た事には目もくれず、俺の机の周りを囲むように人集りが出来ていた。中心は間違いなくあいつだろう。「ねえねえ。君。名前は？」

「ミノコ！」

「着てるのってコスプレの衣装だよな？ テレビでやってたぜ。えーっと確か……」

俺は人集りを掻き分け、ミノコの手を強引に掴んだ。

「何だよ？」

「ちよつと来い」

俺はミノコをひっぱるように校舎の外に連れ出した。この辺りなら大丈夫だろうと手を放す。

「何で倉庫から動いたんだ？」

「だって、暇だし、変な臭いするし」

確かにあそこの倉庫は汚くて石灰の臭いがきついが、まあ要するに、じつとしていられないんだろう。改めてこいつの純然たるガキっぽい性格を何となく把握した。

「道具。探すんだろ。さっさと探すぞ」

服の袖をひっぱり、駄々をこねる子供のように言った。

「一つ断っておく。お前は俺の僕だ。そこは理解しているな？」

「うん。で、探す道具って何なんだ？」

理解するという事を理解してないな。まあ、どの道手伝って貰う予定だったのだ。やりやすくなって良かったじゃないか。そう思う。

手帳を出し、今朝、黒魔術の本からメモしたものを眺めた。

「まず、簡単なものから始めよう。道具は全部で五つある。一つ目は、かわいい女の子のブラジャーだ」

「ブラジャー？」

俺は高らかにミノコを指差しながら、こう言った。

「お前に最初の任務を与えよう。クラスでかわいい女の子のブラジャーを貰ってくるのだ！」

「ブラジャーが何だつて？」

聞き慣れた声が背後から聞こえた。恐る恐る振り返るとそこには同じクラスの女子、三塚^{みつが}が立っていた。腕組しながら不信感をあらわにしている。

「盗み聞きしてたのか？」

「そうよ」

こいつは俺が苦手とするタイプだ。がみがみとうるさく、しつこい上にやたらつかかってくる。つり上がったすどい目つきに睨まれると、どんな男でも大抵怯む。巨乳で、顔もまあまあ可愛いが性格がいかに。

「教室に戻つてろ。お前と話している暇はない」

「その子に変な事させようとしてたでしょ？ 学級委員長として見逃すわけにはいかないわ」

「お前には関係ないの」

俺は「しっし」と手を振った。

「怒るよ？」

三塚はどこに隠し持っていたのか、分厚い英語の辞書を片手に持っている。それを小さく振り、手の平上でポンポンと音を鳴らしながら威嚇している。

これはまずい。去年の夏、あの辞書で叩かれた事がある。

俺と三塚は違うクラスで、登校の際に見かければ少し会話する程度の間柄だった。ひよんな事から胸の話になり、ほんの冗談半分で大きさをからかった事がまずかった。突然、赤い顔になり辞書を振り回してきた。俺は意表をつかれ一撃を貰ってしまったが、とにかくあれ以来、辞書を見ると俺の痛い思い出が蘇る。

「わかったよ。まあ要約するとだな」

「うん」

「お前のブラジャーでも我慢してやるから、俺によこせて事だよ」
ずどんつと鈍い痛みが前頭部に走ったかと思うと、目の前が真っ暗になった。俺とした事がまたしても不用意な発言だったと後悔する。

この日以来、俺の中では辞書「凶器」という方程式が成り立つ事だろう。ミノコが「おー」とか言ったようだが、記憶はそこで途切れた。

三話 【サモナー】

ベッドの上で目が覚めた。横では三塚が心配そうな表情で座っている。

「目が覚めた？」

どうやらここは保健室のようだ。体重計、身長測定器が置かれている。保健室の先生は出かけているのか、ここにはいないようだ。

「ごめんね。ちょっとやりすぎちゃった」

本当だ。ふざけるなど言いたいところだが、やけに素直なため怒る気にもなれない。

「でも、女の子に向かってブラジャーをよこせだなんて、誰でも怒ると思うわよ」

「それで殴るのはお前ぐらいだけだな」

俺はふうつと溜息を漏らしながら、かけられた時計に目をやった。もうお昼前だ。そんなに寝てたのか。俺は。

「で、あの子は何？ 全部話してもらうわよ」

「お前には関係ないだろ」

「関係あるわよ。私は学級委員長なのよ。トラブルになれば、それは私の責任だわ」

委員長、委員長とうるさい奴だな。何でも首をつっこむのは悪い癖だと気づけ。

「あー。面倒くさいやつだな。お前」

「褒め言葉として受け取っておくわ」

三塚はふふんと肩まで伸びた茶色の髪を捲り上げる。さすがの俺もこいつのしつこさに折れた。そして、今までの事を正直に話した。嘘をついてもこいつにはばれる。

「大体わかったわ。ミノコちゃんだっけ？ その子を異界に戻すための道具を集めようというわけね」

「わかってもらって何よりだ」

「でも、召喚行為は違法だよな？ わかってやってるの？」

そう。違法だ。そんな事はわかってる。それは悪い事に利用する奴がいるからだ。召喚は異界に住む生き物を何でも呼び出す事が可能だ。その気になればドラゴンや魔王だって呼び出す事ができる。何でもありだ。しかし違法にならず、召喚した魔獣を引き連れて犯罪を取り締まる職業が存在する。

それはサモナーと呼ばれ、俺はそれに憧れていた。

だから、俺はその真似事をしてみたかったのだ。ペットにして、サモナーと同じように引き連れて……。そうさ、簡単に言っていると目立ちたかった。だが、その思いをこいつに言ったところで馬鹿にされるだけだ。

「ふん。お前にはわからんさ。男のロマンって奴が」

「わからなくて結構。ロマンって言って誤魔化しているようにしか見えないんだけど？」

見透かされた気分だが、後々うるさいので反論はしないでこつこつ

「後、その道具にブラジャーっておかしいでしょ。常識的に考えて」

「本に書いてあったんだよ。興奮する物って」

「別にそれブラジャーじゃなくてもいいじゃない」

「うるさいな。パンティかブラジャーかと言われれば、俺はブラジャー派なんだ」

「あっそう」

三塚はこれ以上その話しをする気はないのか、細目で冷たい視線だけを送っている。俺はそれを交わしながら、話題を切り替えた。

「そつえば、ミノコはどうした？」

「教室にいると思うわ。私が連れて行つたの」

あいつがじつとしているとは思えない。なんせガキだからな。

よつこらしよと言ってベッドから立ち上がり、保健室から出ようとした時。

「あんだ。またミノコちゃんに変な事……」

「言わないって」

母親がお前は。俺はドアを開け、わざと音を立てるように閉めた。

昼前というのはラッキーだ。昼休みに入ると食べ物^の争奪戦が始まり、猛者どものおかげでお望みの物を買えなくなる。俺は一階にあるパン売り場へゆうゆうと赴き、すぐ無くなるカレーぱんとあんばんを買った。

一階の保健室から二階の階段を上っている間に丁度良く昼休み開始のチャイムが鳴り、俺は咄嗟に身構えた。二年の三クラスの扉がほぼ同時に開き、そこからぞろぞろと鉄砲玉のように飛び出して来る。こいつらは校則を何と心得ているのか。ぶつからないように避けながら進む身にもなれつてもんだ。

教室に戻ると、俺の席にはミノコが気持ち良さそうに眠っていた。起こさないようにしようかなと思ったのも束の間、俺は愕然とした。机がよだれまみれなのだ。

「起きろ。馬鹿」

俺は怒りをこめて少し強くミノコの頭を叩いた。それがいけなかったのだろう。いきなり起き上がったかと思うと俺の腕を「うがー！」と言つて噛んできた。

「ぎゃあっ！！！」

情けない悲鳴をあげてしまった。必死に腕を振るも中々離そうとしない。弁当を食っている連中がびっくりしてこっちを見ている。

「は…離してくれっ！ あだだだだっ！」

「何してるの？」

いつの間に戻っていたのか。三塚が目丸くして言った。その瞬間、ミノコは俺の腕から離れ、床に力なく尻餅をついた。

「むにやむにや。ご飯かと思った」

腕にはしっかり歯型がついている。この後、体育だったのに何て事しやるんだ。

「大丈夫？」

「ああ。何とかな」

負傷の腕をなでながら、ミノコを上から睨む。穏便な俺も今はさすがに怒っていいよな。三塚は俺の方をちらつと見て、友達が待つ自分の席へ戻っていった。

俺はハンカチを取り出し、机の上の汚いよだれを拭いてから椅子に座った。

「ご飯くれるのか？」

机に置いたビニール袋を見るや否や、座った状態からヒョコと顔だけ覗かせたミノコが憎たらしい笑顔で言った。

「お前にはやらん」

「何で？」

「これは俺の買った物だからだ。お前はそこら辺りの虫でも食ってろ」

「ご飯！ ご飯！」

机をバンバンと叩くミノコ。それでも動じない俺に対し、強硬手段としてビニール袋を引っ張ってきた。

「何してるんだお前。は・な・せ！」

「やだっ」

お互いに一つの物を引っ張り合う図はさながら兄弟げんかのようなだった。なかなか離そうとしないミノコに、耐えていた堪忍袋の緒がついに切れた。

「やらんと言ってるだろ！」

俺は怒気を含ませて言い、そして睨んだ。ミノコは口を半開きし、叱られた子犬のようにしゅんとした表情を見せる。そしてやっと手を放したかと思うと、教室からとぼとぼと出て行った。

「ふん」

「ふん、じゃないわよ」

そう言われながら側頭部をコンと置くように叩かれた。横を見ると辞書を持った三塚の怒り顔がそこにあった。辞書を見た俺は恐怖で咄嗟に身を引く。

「かわいそうじゃない。何で分けてあげないの？」

「う…うるさいな。ほっとけよ。それより辞書しまえ」

「私、捜して来る」

三塚は軽蔑の眼差しを俺に送り、教室を出て行った。

放っとけばいいのに。腹が減ったらその内帰ってくるだろうよ。

四話 【イノシシと石頭】

体育の時間は本当に嫌だ。今は四月だからまだいいが、夏場に外で運動は本当に勘弁してほしい。

体操服に着替えた俺は、肌寒いと感じながら外の集合場所に集まった。遅れて三塚が胸を揺らしながら走って来て、男どもの視線を釘付けにしている。こいつの体操服姿はやたら胸が強調されていて男子にとっては目の毒だな。

「ミノコは見つかったか？」

俺は胸を見ないようにしながら、何となく聞いたみた。

「見つからないわ。あんたのせいなんだから、後で捜すの手伝いなさいよ」

三塚は息を整えて言った。

「わかったよ」

元はと言えば俺があいつを召喚してしまった事が原因だ。非は俺にある。しかし、どうもガキはわがままで苦手だ。俺がこの先しばらく我慢しろというのか……。

今日はグラウンドでサッカーをやるようだ。準備運動を終え、適当に二チームに分かれた後、各々がポジションにつく。自動的にサッカー部の連中が中心になるのだが、俺を含めて複数の連中がどうも乗り気じゃない。ボールが来ても知らん顔する奴もいるが、俺の場合、とりあえず思いつき蹴り飛ばす。それがあらぬ方向に行ったり誰かに当たったりするが気にしない。ストレス解消で蹴っているだけだ。

どうでもいいが、体育の先生はそんな俺達の光景を見てどう思っているのだろうか？ そんなくだらない事を考えている時に事件は起きた。

「キャアッ！」

突如、女子の悲鳴がグラウンドに響き渡る。山から下りて来たの

だろうか？ 茶褐色でブタのような動物が歩いている。しかし、口元には鋭い牙が生えていた。

「野生のイノシシだ！ 皆離れて！」

体育の先生が生徒達に叫び声をあげる。その声に反応したのか、イノシシは猪突猛進し、こちらへ向かってくる。スピードは速く、その先には不運にも三塚が立ち尽くしていた。

「三塚！ 早く逃げろ！」

俺の叫びは届いていないのか、突然の出来事に彼女の足は固まって動けないようだ。口元が震えている。ぶつかるまでもう時間はない。

「ちっ！」

俺は何も考えず地面を蹴った。ゆっくりと時が流れる不思議な感覚。自然に行動した自分自身に驚いたと同時に鳥肌が立った。

おかしいぞ？ 俺はこんなにも熱い男だったのか。

ぶつかる間一髪のところ、三塚を抱え込みそのまま地面へ倒れこむ。砂埃が宙を舞い、横をイノシシがすり抜けていった。

俺は咄嗟に閉じた目を開けてみると、押し倒したように俺が三塚の上に覆いかぶさり、すぐ下で彼女は腕を縮こませ震えていた。

「あ……」

三塚は何か言いそうになるが、顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。俺も何となく恥ずかしさが込み上げ、三塚から離れる。

やれやれと安堵するのも束の間、イノシシは踵を返して再び突撃の姿勢へと移った。

やばいぞ。どうすればいいんだ？ 顔から汗が噴出し、野生の獰猛な目つきを直視できないほど慄いていたその時だった。

「がおーっ！」

イノシシと対峙し、駆けつけたその声はどこか間が抜けていた。

ピンクを基調とした彩色で白のひらひらが付き、大きなリボンが特徴的だ。そして、頭には大きめの帽子。そんな格好をしている奴は俺の知っている限りただ一人。犬のように四つん這いになり、角

を傾けて威嚇している。

「うがーっ！」

イノシシはいかにも弱そうなミノコを見て、目をぎらつかせている。そして鼻息荒く飛び出した。しかし、ミノコは動こうとしない。まさかそのままぶつかるつもりか？

「避ける！ 馬鹿！」

三塚は手で顔を覆っているが、俺もそうしたい気分だ。

イノシシはスピードを加速させ、ミノコに正面から衝突する。

辺りに響き渡る破裂音。

砂埃が立ち込める中、てっきりミノコが吹き飛ばされたかと思っていたが、どちらも微動だにしない。——いや、イノシシがよろめく。ダメージをより受けたのはミノコの方ではなかった。

何て石頭なんだ。

感心しているとイノシシは戦意喪失したのか、逃げるように山へと走り去っていった。それでもなお警戒は解かず、四つん這い状態のミノコの元に俺は近づき、ずれた帽子を直してあげた。

——よくやったな。

心の中でそう思い、ほくそ笑んだ。しかし、次の瞬間、ミノコは敵だと思ったのか腕に噛み付いてきやがった。

「ぎゃあっ！——！」

本日二度目の俺の悲鳴。泣きたい。

その後、ミノコは先生や生徒に褒められて人気者になった。授業が終わると終始ニヤケ面のミノコの腕を引っ張るように学校を出た。「えへへ。ミノコ。たくさん褒められちゃった」

「ご満悦の感情とは逆に、俺は両腕を噛まれた痛みと戦っているため、つらかった。」

こういう場合はどうなのだろう？ まず俺も褒めるべきなのだろうか？ いや、とても褒める気になれないし、それどころか痛みのせいで憎悪が湧いてくる。子供を叱るうかどうか悩んでいる親の気

持ちに近い。

俺は無言のまま淡々と山道を上って行く。

「待って！」

後から三塚が息を切らしてやって来た。

「はあ……はあ……。急にいなくなるんだもの。びつくりしたわ」

こいつが俺に用事？ 体育の時間に助けた事のお礼か。そんな事をされたらむず痒くなるからやめて欲しいんだが。

「今日から私もミノコちゃんの保護者になりました」

「は？」

「先生に頼まれたのよ。天道寺だけじゃあ心配だってね。私もそれに賛成したってわけ」

そついう事か。俺は的外れな期待をした自分の照れ隠しするように俯き、顔を掻いた。

「というわけで、よろしくね」

手を差し伸べられたミノコの上にハテナが浮かんでいる。

「ご飯くれるのか？」

「握手だよ。手を握り合うんだ」

意味がわからないまま、手を握るミノコ。何か嬉しそうだ。このままあいつの世話は三塚に頼んでしまおう。その方が楽だ。

帰りの山道は行きと違って気分は良いが面倒なものには変わりはない。三塚とミノコが仲良く歩きながら話しているところを見て、こいつは以外に世話好きなんだなと感心した。

「ミノコちゃんは女子寮の方で預かるけど、それでいい？」

山の麓の下り斜面を歩きながら三塚が俺に言った。その意見には大いに賛成だったので、二つ返事で了承すると彼女はとても嬉しうだった。

入り口に着くと二人と別れ、学生寮の自室に向かった。ミノコは寂しそうに俺の方を見ていたが、俺は正直厄介払いが出来てホッとしている。

ミノコには悪いが、助けて貰った恩よりも両腕を噛まれた悪い出来事の方が俺の中では大きいのだ。そうだ。決して礼を言うのが恥ずかしいとかそういう事じゃなくてだな。って、何俺は自分に言い訳しているんだ。

部屋に入り、机の上にカバンを置いてベッドの上に寝転んだ。日が傾いていて、窓から降り注ぐ西日が眩しい。今日は色々な事があって疲れたからこのまま寝よう。俺はそのまま目を閉じた。

「信也！ し・ん・や！」

あれ？ 幻聴が聞こえるな。ついに頭がおかしくなったか？ 目を開いて頭を摩ると、三塚に辞書で殴られたところが脈打つように痛んだ。

「ここか？」

ドアが勢いよく開き、紙袋を持ったミノコが入ってきた。俺はドアの音に少し驚いてからすぐに起き上がった。

「何しに来たんだよ。お前」

「やっぱりミノコ。ここで生活する。恵美には言っておいた」

恵美とは三塚の下の名前だったな。それにしてもこいつの言った事を簡単に許すとは、あいつ、何考えてんだ。

「これ。恵美が渡してくれって」

ミノコは紙袋を差し出した。あいつが？ 俺は恐る恐る中身を覗くと、そこにはブラジャーと女物の服が何着か入っていた。中には一枚の手書きの紙が入っており、「ミノコちゃんに着せてあげて」と短く書かれている。といってもこいつにブラジャーは必要ないだろうが。大体三塚とミノコではサイズがまったく合わないし。

これってもしかして儀式に使っていいって事なのか？ 照れて、この紙には書けなかったんだろうか？ ややこしい奴だ。そう思いながらも三塚に感謝している自分がいた。

俺はミノコが被っている帽子を取り、頭を撫でてやった。

「よくやったな。最初の道具が手に入ったぞ」

「ん？」

ミノコはどういう事だか理解していない様だが、俺に微笑みを向けてくれた。

五話 「召喚獣コボルン」

今朝は驚いた。ミノコが床で寝ているのではなく俺のベッドで、正確に言う俺の顔と向き合う形で寝ていたからだ。起こす事が憚られる表情で寝ていたが、すぐにそいつから発する鼻に付く臭いに我慢が出来なかった。

「どこで寝てるんだ！」

俺はミノコの顔を足で軽く踏んづけてやった。

「むぎゅ……」

薄暗い室内で、やけに似合っている魔法少女の服、乱れた髪、緩みきった締りのない顔がそこにあった。こいつと生活するようになってまだ数日しか経っていないが、色々この世界に慣れてもらわないと困る。風呂もろくに入らないわ、箸も使わず手で食べるわ、拳句の果てに俺と一緒に寝るわ……。とにかくこのままだと俺が困るので、しつける事に決めた。

今日は食堂で箸を使うよう促すが、使い方を説明した最初の方は一生懸命頑張っていた。しかし、うまく掴めない事にイライラしたのか、「むにゃー！」と言って箸を真つ二つに折る始末。その後、俺が食堂のおばちゃんに謝ったのは言うまでもない。

「おはよう」

ミノコの保護者となった三塚は、山道の入り口で俺たちを待っていた。三人で登下校するのは新鮮だ。変な噂が立たなければいいが「ミノコちゃん。その服昨日のままじゃない」

「うん。これ着やすいからな」

「そうなの」

二人の前を歩いていた俺の元に、三塚が歩み寄り、「ちよっと。せっかく服あげたのに何で着させてあげないの？」

と小さな声で耳打ちしてきた。

「仕方ないだろ。あれが気に入っているんだ」

「汚いでしょ。あんたがちゃんと言って聞かせないと」

「お前が言えればいいだろ？」

「はあ？ 私にそんな役押し付けるわけ？」

振り返らず淡々と前の斜面を上って行く俺に、いかにも不満そうな口調で言った。要するにこいつは自分の発言を俺↓ミノコという伝達順序にしたいらしい。

なぜ直接言わないんだ？

「そういえば儀式の道具って後、何と何があるの？」

ミノコと談笑している三塚が思い出したかのように聞いてきた。

「ああ。えーと……」

カバンから手帳を出し、儀式の道具が書かれたページを眺めた。

「ねずみのしっぽ、毒ガエル、魔法の鍵、魔力天然水の四つだな」

「げっ。ねずみにカエルか」

三塚は嫌な物を想像したという感じでボソツと言った。

「それをどうやって探すの？」

「魔力天然水はこの山の奥地にあるが、後の三つはわからん」

「あれ？ でもミノコちゃんを召喚した時の道具はあんたが揃えたんだよね？」

「召喚獣を召喚する時の道具と異界に帰す時の道具は違うんだ」

「ふーん。何だか面倒くさいわね」

そう。道具集めがとても面倒くさいのだ。逆に簡単であれば、いとも簡単に召喚する事が出来てしまい危険だと言える。

「私に手伝える事があれば言つてよ。…もちろん、あんたのためじやなく、ミノコちゃんのためだから」

別にそこを強調しなくてもいいだろ。

はいはいと適当に答えながら、小鳥の囀りが響き渡る山道を進み、学校へと向かった。

その日の午前中は道具をどうやって探そうか考えていたが、分らないまま昼休みに入った。パン売り場から生還を果たして戻ってくるとミノコがお腹を鳴らして待っていた。ミノコはそれまで授業中邪魔なので保健室にいた。

机の横に座り、ピヨコと顔だけ覗かせるスタイルは昨日と同じだ。

「今日はご飯、くれるのか？」

「まあな」

俺はビニール袋からメロンパンを取り出し、半分縦に裂いて渡した。ミノコはそれを手に取り嬉しそうに食べ始める。

犬に餌をあげている気分だ。とは言うものの、こいつの幸せそうな顔を見ると俺まで元気をもらう。不思議な奴だ。

窓の外のきれいな山々を眺めながら、俺は再び考え始めた。

「魔力天然水はいいとして、ねずみのしっぽはねずみ捕りでも仕掛けて待つしかないか」

「……それなら僕が持っているよ」

どこから声が聞こえたのかと思い、横を振り向くと一条が俺の方を見ていた。弁当を食いながら片手に本を持っている。

「本当か？」

会話らしい会話をした事もない奴から突然話しかけられたので戸惑った。

一条は今読んでいるページがわかるように本を被せて置くと、眼鏡のつるの部分を持ち上げる。

「ああ。僕はオカルト部だね。そういう黒魔術に使う様な物は持っているんだ」

「…そうか。それなら、今日の放課後行っていていいか？」
「いいよ」

オカルト部？ そんな部活が存在したのか？ とにかくこれで運良く、ねずみのしっぽが手に入る。

「オカルト部何てあつたんだ」

一条を先頭に三塚も含め四人でオカルト部の部室へ向かっている途中、三塚が囁いた。

俺達がいた南棟の一階から渡り廊下を進んで北棟へと進んでいく。北棟は理科の実習室や家庭科室がある場所で、ほとんど行った事がなかった。最近ではお化けが出るという妙な噂も立っているらしいが……。

二階のさらに北側奥まで来ると、小さくオカルト部と書かれたプレートが貼り付けられたドアの前で一条は立ち止まった。この辺りは人通りが少なく、窓は常に締め切っているので空気が淀んでいる気がする。

一条は鍵を開けて部室に入っていく、俺達も後に続いた。

「おじゃまします」

そこはカーテンをしていないのに薄暗く、木の焦げた臭いがした。本棚には分厚い黒魔術関係の本が数冊転がっており、部屋の真ん中にある小さな丸机には蝋燭が置かれていた。それ以外は目を見張るものはなく、何が入っているのかわからないダンボール、不釣り合いな電気ストーブが隅っこに追いやられている。

「臭いなここ」

ミノコは一条が傍にいるのにも関わらず、鼻を摘んで言った。一条は聞こえていないふりをしているのか、ダンボールからごそごそと何かを探している。

「他の部員はまだ来ていないのか？」

俺が一条に問いかけると、小さな声で「僕一人なんだ」と言った。つつこんではいけないところをつつこんだ気がする。ばつが悪くなり顔を掻いた。

一条は透明のカプセルを取り出すと出口に向かって歩き、

「ねずみのしっぽだ」

と言つて、俺達に見せ付ける。それはトカゲのしっぽと同じくらいの長さがあった。

一条は一呼吸置き、弱々しい声を振り絞るかのようにこう言った。
「そのミノコさんと僕の召喚獣を交換するという条件で、これを渡そう」

「え？」

俺は驚いた。

なぜミノコが召喚獣だと気づいた？ それに僕の召喚獣とはどういう事だ？

「昨日の体育の時間、ミノコさんの頭に角が生えているところを僕は見たんだ」

一条はカプセルをポケットにしまうと、別のポケットから赤色のビー玉のような物を取り出した。そして、それを放り投げて、こう叫んだ。

「コボルン！」

その瞬間、ビー玉から耳が生え、狼の顔をなし、尻尾が生えた召喚獣コボルトへと高速に姿を変えていく。槍を持ち、上半身は裸だが下半身は薄茶色のぶかぶかのズボンを着ている。しかし、獰猛さはかけらもなく、性別は男のようだがミノコ同様可愛い顔をしている。

その様子を見た俺達はミノコを含め、目が点になった。

どうなってる？ 何が起こった？

一条はコボルンと呼ばれる召喚獣の背後で不気味に口元を吊り上げていた。

六話 【ミノタウロスvsコボルト】

「僕は半年前、興味本位でコボルトを召喚させた。そして、色々研究している内に召喚獣は自分の意思でサモンボールに変化する事が出来るとわかったんだ」

一条は驚いている俺たちの前で得意気に言った。

「サモンボールって、さっきのビー玉の事？」

「そうだ。全ての召喚獣はそのスキルを持っている」

ならミノコも使えるのか？ いや、それよりも今はこいつに聞きたい事がある。

「ミノコと交換ってどういう事だ？」

「そのままの意味だ。ミノコさんがとても強く、魅力的だと思ったから交換したい」

「ふざけないで！ 召喚獣は物じゃないわ！」

三塚が俺の気持ちを代弁するかのよういきり立った。

こいつの話を聞く限り、おもちゃで遊んでいて、別の新しいおもちゃが面白そうだったからそれと交換してくれといっているようなものだ。賛同する奴がいると本気で思っているとしたら、こいつは相当の馬鹿だな。

「そこを通らせてもらうぜ」

もうこいつと話す気はない。帰ろう。

「交渉決裂か。じゃあ、僕は強硬手段で行かせてもらう」

その言葉を聞いた時、嫌な予感がして身構えた。危機察知能力でも言うのか。

「やれ！」

その言葉が引き金となり、コボルトは槍を構えたと俺に向かって突きを放ってくる。刹那、槍が届く前にミノコが素早くコボルトの顔を横から蹴飛ばした。丸机ごと飛ばされ壁に激突するが、咄嗟に軽い身のこなしで着地する。

無言のまま怯む事なく床を蹴ってミノコに槍ごと突っ込むが、ミノコはそれを避けて頭を振って頭突きをする。しかし、空振りに終わるとコボルンはさっきのお返しとばかり槍を連続で放ってくる。体勢を立て直す事ができないまま槍が肌を傷つけ、服が破れて血が滲み出た。

一連の流れはとても速く、眼で追うのが精一杯だ。俺が太刀打ちできる相手ではない。

「やめてっ！」

三塚の悲鳴が部屋に響き渡る。

「馬鹿野郎！ これ以上戦わせて何になる！ 今すぐ止めさせろ！」

俺は二匹が戦っている隙に一条に詰め寄って声を荒げた。それに対し奴は沈黙し首を横に振る。止める気はないようだ。

「このっ！」

俺はさらに近づこうとした。しかし、それに気づいたコボルンは戦いを中断し、風を切るような速さで一条の前に現れた。遅れて、ミノコも空中でくると回転し俺の前に着地する。

なぜこいつはこんな奴のために戦うんだ？

「おい。お前、コボルンとか言ったな。お前が守っている一条は召喚獣のお前を物や道具の類と思っている奴だぞ。そんな奴の言う事を聞く必要はない」

この召喚獣に説得が通じるとは思えなかったが、俺は思いのたけのぶつけてみた。

「一条は……」

コボルンは表情を変えず口を開く。

「おいらが守ってやらなきゃ、誰が守ってやるんだ？ 一条はずっと一人ぼっちで苦しんでいた。誰からも相手にされず、本を読む事で誤魔化し続けてきた。おいらには、おいらにだけは話してくれたんだ。だから、僕としてじゃなく友達としておいらは……」

「よ……余計な事を言うな！」

一条の怒声にコボルンは肩を震わせ、口を閉ざした。その後で一

条が赤い顔をしながら強がった子供のような眼で俺を睨む。

恥ずかしいだろうな。こりゃ。

召喚獣は正直者が多いのか。この時ばかりは一条の心情を察した。
「ミノコは信也の僕だから守る。恵美は友達だから守る」

対抗するようにミノコは言い、コボルンに向かって飛びかかる。
戦いが再開された。

槍を避けつつ、接近し打撃で攻めるミノコ。打撃を避けつつ距離を取り、槍を放つコボルン。両者は互角だった。

しかし、お互い疲労が見え始めると浅い傷をいくつも負うようになる。

部屋は机や本などでぐちゃぐちゃになっていた。

見ているしかない自分に歯痒さを感じていると、三塚がふらふらと一条に近づいて行く。その表情は伺い知る事はできないが、ぶつぶつとお経のように何かを呟き、片手にはお馴染みの辞書を持っていた。

あの？ 三塚さん？

俺は急いで後ろから羽交い絞めにして止めた。

下手すりゃ死人が出る！

「こ…これ以上やるつもりか！？」

俺はお願いするように言った。三塚が暴走したらどうなるか想像したくない。

しかし、一条はそんな声は届いていないのか、天井の一点を見ながら思いつめた表情で立っていた。

僕がコボルンを初めて見た時、お世辞にも強そうに見えなかった。
でも、とても優しい奴で徐々に仲良くなっていた。

「ねえ一条。今日も一人なの？ 前に言ってた友達ってやつ作らないの？ え？ あんな低俗な奴らと仲良くする気はない？ ダメだ

よ。そんな事言っちゃあ」

僕の愚痴を聞いてくれて、それが日課になっていた。

「一条は自分から声をかける勇気を持たないと。そうだ。おいらが人の役をやるから練習しようよ」

「おいらよりも友達と話した方が楽しいんじゃない？ そんな事ないって？ 一条は優しいなあ」

「しょうがないなあ。じゃあおいらが友達になってあげるよ」

傷つくコボルンを見て心が痛む。僕は召喚獣が欲しかったわけじゃない。ただ、友達が欲しかった。

コボルン。君のような友達が。

それなのに今更気づくなんて僕は――。

コボルンの動きは極端に鈍くなり、ミノコの頭突きをまともに受けた。

吹き飛ばされて壁に激突し、部屋が揺れる。

着地する余裕もなく倒れるコボルン。しかし、震える手を床につき何とか起き上がる。一条は息切れをして今にも倒れそうな友達を見て、膝をつき、がつくりとうな垂れた。

「もう。止めてくれ……」

そこにあっただのは、俺が知っている弱々しい男の姿だった。

「もういい」

一条の力ない声にコボルンは俯くと、体が勢いよく小さくなりサモンボールとなって床に転がった。一条は立ち上がり、それを指で

摘むとポケットの中に戻した。そして、

「すまなかった」

と頭を下げた。

「謝って済む話じゃないわ！　すぐ先生に」

いくらか平常心を取り戻した三塚は俺の腕から離れ、声を荒げる。

「待てよ。三塚」

今にも辞書で殴りかかりそうな彼女を言葉で制止し、俺は一条を見た。

「もう二度とこんな事するなよ」

俺がこう言ったのは、目の前の男にはもうそんな気力はないように思えて仕方なかったからだ。それに、これ以上一条と三塚を同室にするのはマジで危険だ。

「ああ。もうしない」

その時の一条の眼は、真っ直ぐに俺を見ていた。

「これは…お詫びのしるしだ」

一条はポケットからねずみのしっぽが入ったカプセルを取り出した。俺はそれを無言のまま受け取り、部室を後にした。三塚は何か言いたそうだったが、俺の後について来た。

部室の外ではどうしたどうしたと人が集まってきている。俺達は質問をされると面倒なので、ミノコの腕を引っ張り、足早に学校を出た。ミノコの服はボロボロで、所々切れている隙間から見える傷ついた肌が戦いの激しさを物語る。

「ミノコちゃん。大丈夫？　痛くない？」

三塚は母親のように心配そうな顔で見つめている。

「うん。大丈夫。全然平気」

こんな状態でもニカツと笑っているミノコを見て、こいつは痛みを感じないのかと思った。しかし、その後一瞬見せる辛い顔を俺は見逃さず、ああ、こいつは我慢しているだけなんだなと理解した。

これで守られるのは二度目か。

釈然としないまま山道を通り、寮の自室に帰ってきた時はもう日が沈みかけていた。後から三塚も救急箱を持って、俺の部屋に来た。本当は男子寮に女子が入ったらいけないんだがな……。

「あんな奴ぶっ飛ばせば良かったのに」

一通りの傷の手当を終えると、三塚は吐き捨てるように言った。

「だから辞書はやめろって。俺を気絶させた事忘れたのか？」

「だって、ム力つくし」

子供のようにムツとした表情は不覚にも少し可愛いと思った。

三塚は用が済むとミノコの頭を撫でて、部屋から出て行く。俺は椅子に座り、ぺたんと座っているミノコを見下ろした。

今着ているのは前に三塚が持ってきた女の子用の服だ。ボロボロになった魔法少女の服は三塚が持ち帰って、縫って直すらしい。

「お前。痛いなら痛いって言えよ」

「痛くない」

子供のようにムツとした表情は俺を苛立たせた。

変なところで頑固だな。そんな事より聞きたい事が俺にはあった。

「そういえば、ミノコもサモンボールに変化できるのか？」

全ての召喚獣はそのスキルを持っていると一条は言っていた。

「ミノコ、やってみる」

「……………」

少し緊張しながら見ていたが一向に変化はない。ミノコは両手拳を握って踏ん張ったり、腕を広げて伸びをしているポーズを見せたり頑張っているが、無駄なようだ。

「うぎぎ！」

「もういいって」

頭にチョップを食らわすとミノコはもう少し待ってと言って、奇声をあげ始める。

食事まで時間があるし、一眠りするかな。その前にこいつを黙らせる必要があるが。

結局、ミノコはサモンボールに変化する事はできなかった。俺は

特に気にしていなかったが本人は気にしているようだ。

七話 【負の感情】

カーテンを開けると今日も快晴だった。ミノコは俺のベッドで気持ち良さそうに寝ている。もう追い出すのも面倒くさい。

俺はミノコの髪を嗅ぎ、あまり臭くない事を確認する。ようやく風呂に入ってくれたようだ。ちゃんとパジャマにも着替えるようになったし、いい感じに俺の言う事を聞くようになったじゃないか。僕としての自覚とでもいうのか。

感心していると、寝ぼけたミノコの頭突きが顔面を襲った。鼻の骨が折れるかと思うぐらいの衝撃。

こいつ、マジで許さん。

そう思った俺はミノコの柔らかそうな両側のほっぺを掴み、思い切り引き伸ばした。

「んあ！」

ミノコはジタバタと手を動かし暴れる。

やられてばかりでは性に合わん。今こそ積年の恨みを晴らすべきだ。

俺のスタイリッシュな攻撃に、ミノコは涙眼で俺の両側のほっぺを掴んで、同じように引き伸ばし返してきた。

さながら小学生のケンカのようだった。しばらくそのまま引つ張り合いが続き、離れた後はしばらく頬がヒリヒリと痛んだ。

そんなケンカもご飯を食った後はケロッと忘れてるのがミノコという馬鹿で。時に羨ましくも思う。

今日も午前中は雲一つない晴天だが、携帯電話に映る天気予報によると、午後から雨が降るようだ。

学校では一条が体調不良で休んでいた。昨日の事が関係しているのだろうと思った。昨日まで授業中は保健室にいたミノコは今日から先生が機転を利かせて最後列に臨時の席を設け、そこに座ってい

た。

先生が俺の妹説をそのまま鵜呑みにしたのかどうかはわからない。それを含めても謎が残る待遇だ。

休み時間に入るとミノコの周りには四人ぐらいの人が集まって質問攻めに合っている。別のクラスメートの人もいるようで、相変わらずの人気だ。

「イノシシと対峙した時、どんな心境だった？」

ある女子が口を開くと、

「正直怖かった。けどミノコ、負ける気がしなかった」と、ミノコは得意気に語り出した。

俺は「このミノコは俺が召喚したんだ。凄いだろ」と言いたかった。しかし、クラスメートや先生には俺の妹という事になっているので、その事は言えず。

何でミノコばかり褒めるんだ？ 召喚した俺が一番凄いだろ？ 奥歯を噛みしめながらそう思った。

今日から授業を早めに切り上げて、先生と生徒、親で進路相談が行われるらしい。通常は出席番号順に親の都合も加味されて行われるが、俺の両親は共働きで実家が遠い事もあり、親が学校に来る事ができない。そのため、いつでも時間の都合がつく俺は最初に順番が回ってきた。

それにしてもまだ二年だっていうのに、進路の事を考えるのは早いんじゃないか？

進路相談は教室で行われる。皆が帰った後、俺と先生は机を挟み、対面して席に着いた。窓から外を見ると空は曇っていて今にも雨が降りそうだった。

「天道寺。進路の事は何か考えているか？」

「いや、別に」

まだ先の話だと思い、考えているわけなかった。

「進学したい。就職したいというのはあるだろう？」

先生は俺が前に書いた進路調査票を見ていた。

「まあ、進学したいと思います」

「そうか。どこに進学したいとかは決めてないのか？」

「特に何も」

俺の答えに少し悩んだ様子の先生は、こう問いかけてきた。

「天道寺。やりたい事はないのか？」

「やりたい事？」

「そうだ。夢でも何でもいいんだ。自分は将来こうなって社会に貢献したい！それが目標になり、それに向けて頑張れるだろう？」

ただどこでもいいから進学するんじゃないか、お前のためにならないと先生は思っている」

「……」

「深く考える必要はないぞ。正直に言いなさい」

俺は少し悩んだが、先生の言葉に後押しされて口を開いた。

「サモナーになりたいです」

「ほお。いいじゃないか」

正直笑われるかと思ったが、先生は意外にも、とても嬉しそうに笑いかけてくれた。しかし、次の一言が俺に突き刺さる。

「それに向けて何かしているのか？」

「……別に何もしてません。時々召喚についての本を読んだりしているぐらいで」

「そうか」

先生はまた少し悩むと重たい口を開いた。

「サモナーという職業は生まれ持ったのセンスと何より努力が必要で、とてもつらいが給料もいいし、魅力的な職業だと思う」

一呼吸置き、俺をまっすぐ見てこう続ける。

「天道寺。私が言いたいのは本気でなりたいたいと思っているのだから今すぐ行動に移すべきだ。サモナーになるにはどうしたらいいか？どんな資格があるのか？その資格を取るにはどんな勉強をすればいいのか？その事を知りもせずになんかになりたいと思っ

いるのなら、別の道を進みなさい」

「……」

「特にサモナーの様な一部の人しかねない職業なら尚更だ。きつい事を言うようだが、人生そんなに甘くないぞ」

俺は何も言い返せなかった。先生の言う事は的を得ていて、見透かされた様で悔しさが込み上げる。頭が回らず、先生の目を直視する事すらできなかった。

その後、何を聞かれても上の空。長い進路相談が終わると教室を出た。廊下ではミノコと三塚が待ってくれていた。

「長かったわね。すぐ終わると思っていただけ」

「まあな」

こう答えながらも先生の言った事が頭の中を駆け巡る。

何となくなりたいと思っっているのなら、別の道を進みなさい。人生そんなに甘くない、か。

——……うるせえよ。

それは扇先生、あんたが決める事じゃない。俺の人生は俺の手で切り開くんだ。

自分でも中途半端なのはわかっていた。将来の事を考えた事がないわけじゃない。それでも——。俺は核心を突かれた事の悔しさから負の感情の渦を巻き起こしていた。その思いは決断していい方向には進まないと頭ではわかっていながら……。

「天道寺？　おい」

はっとなる俺に三塚は少し心配そうな表情で顔を覗き込む。

「今日はもう帰る？　疲れてるみたいだし」

こいつに心配されるとは思わなかったので少し驚いた。

ミノコはじっとしてられないのか、ぴょんぴょんと跳ね回っている。

「いや、俺は道具を探す」

「探すってどうやって?」

「……」

俺が無言のまましていると、三塚が口を開いた。

「ネットで検索したらどう? 確か放課後もパソコン室は開いてるでしょ」

そうか。何で気付かなかったんだろ。これは恥ずかしい。

「その手があつたな」

顔を掻きながら小さく答えた。その後、三塚の後を付いて行く形で北棟一階奥のパソコン室に行った。そこは整然とやらんだパソコンが二十台ほどあり、何かを検索している生徒、ゲームをして遊んでいる生徒などがいた。

俺はすぐ近くのパソコンを起動し、インターネットエクスプローラを実行する。ヤッホーの検索窓に毒ガエル、魔法の鍵を入力した。何件も引つかかった。その中の購入サイトを見ると、毒ガエル一匹八千円、魔法の鍵は売り切れと書かれてある。

……高い。八千円って。

「毒ガエルってどんな形しているんだろうね? 見てみようよ」

三塚に言われるがまま、毒ガエルの絵、生息地が載っているサイトにアクセス。横からミノコも興味を持ち覗いてきた。

毒ガエルはその名称通り、毒毒しい紫色の体で体長は成体で十センチと大きい。牙に毒を持っているため噛まれると体がマヒし、酷い時には死に至るらしい。生息地は水辺や川の辺りらしいが、その数は少なく滅多に人の前に姿を現さないようだ。

「お手上げたな」

俺は、椅子に寄りかかり天井を見上げた。

「まだ、あきらめちゃダメよ」

「八千円払うのか?」

「違うわ。扇先生に聞いてみたらどう? 何かわかるかも」

それは嫌だ。進路相談の時に言われた事をいまだに気にしている。
「あの先生は何も知らないだろ?」

「そんなの聞いてみないとわからないじゃない。言っとくけど、これはあんたの責任なんだからね？ わかってる？」

っ！ こいつまで俺を責めるのか。

俺は少し乱暴に立ち上がり、

「別の方法を考える」

と言つて帰ろうとした。

「どこへ行くの？」

俺を問い詰めるような眼。不愉快だ。

「とりあえず帰るんだよ。ここにいてもしょうがないだろ？」

「私、扇先生に話を聞きにいくわ」

「勝手にしろ」

どう言えばいいのかわからず吐き捨てるように言った。くだらない自尊心を守るため。

「行こう。ミノコちゃん」

三塚はミノコの手をとり、俺の横を通り過ぎる。

「ん？ 信也は？」

「一人で帰るらしいわ」

三塚の後姿が遠くなる。カバンを持つ手に力が入り、パソコンに叩きつけたい衝動をどうにか抑えた俺はパソコン室を出た。

ちっちゃえな。俺……。

いつの間にか小雨が降り始める中、傘をさして学校を後にした。

八話 【焦燥】

歸りの山道、しんしんと降る雨の中で、俺はいつもの道はずれた。毒ガエルを探すためだ。毒ガエルは数が少なく滅多に人の前に姿を現さない。という事は人が通るところはダメだ。

ミノコや三塚の助けなど借りずとも俺一人の力で探しやる。そう思い草むらへと入っていった。

私は信也と別れた後、ミノコちゃんと一緒に職員室へ向かった。それにしても、今日のあいつは少し変だった。何かあったのだろうか？

「失礼します」

私はミノコちゃんを外で待たせ、扉を開いた。見回すと扇先生が席に座っていたので、そこへ向かい、

「先生。お聞きしたい事があるのですが」

とテスト採点中の先生に声をかけた。

「三塚か。どうした？ まだ帰ってなかったのか？」

椅子ごとくるっと振り向き、やや疲れ気味の表情で言った。

「はい。ちょっと…用事があったので」

「そうか。それで？」

「は、はい。毒ガエルってご存知ですか？」

「毒ガエル？ あの紫色のカエルの事か？」

「そうです。実はそれを探してまして、どうやったら捕まえる事が出来るか、知ってたら教えてもらいませんか？」

突然の私の質問に少し驚いた様子だった。そして、こう言った。

「捕まえてどうするんだ？」

「それは……」

当然の疑問だろうと思った。返答に困る。

まさか飼うためとか言うわけにもいかないし。売るためとかはもつといけないわね。

「あの子を異界へ帰すための道具を集めているんじゃないのか？」

え？ あの子ってもしかしてミノコの事？ 何で全部ばれてるの？

「やはりそうか」

私の表情を読み取ったのか、先生は、にやつと笑うと語り始めた。
「私も昔、サモナーになりたいという夢を持っていたね。天道寺もそういう夢を持っていると聞いた時、ピンときたんだ。私は興味本位で召喚獣を違法に召喚した事がある。しかし、興味本位で手を出すべきものじゃなかった。私は隠れて召喚獣と一緒に暮らしていたんだが、しだいに私の言う事を聞かなくなり、私は異界に戻すための道具を集め始めた。しかし、召喚獣は暴走して私や家族が怪我をした。全ては私の愚かな行いのせいだ。召喚獣は処分され、私は注意を受けただけで済んだが、とても扱えるものじゃないと夢を諦めた」

お茶を一口飲み、私の返答を待たず続ける。

「今のあの子を見ていると天道寺に懐いているようだから私より素質はあるかもしれん。だが、このままじゃダメだ。お遊びでなれるものじゃない。それをわかって欲しかったから今日、少しきつく言ってしまった」

「先生……」

あいつ、サモナーになりたかったのか。今日のあいつが少し変だったのも、先生にその事について何か言われたからかと少し納得した。

「ああ、話が脱線したな。毒ガエルをどうやったら捕まえる事が出来るのかという話だったな。うーん……。残念ながら私もわからない。サモナーの知り合いがいれば別なのだが、私にそういった知り合いはいないからな。力になれなくてすまない」

「いえ。どうも、ありがとうございました」

私はこれ以上仕事の邪魔をしてはいけないと思い、お礼を言って職員室を出た。

誰にも頼らない。その決心が揺らいできたのは探し続けて一時間ぐらい経った頃だった。

見つからない。

普通のどこにでもいるようなカエルなら跳ねているところを数匹見たが、あの紫色をした大きいカエルは見つからない。ズボンの裾が雨でびしょびしょに濡れ、手も冷たい。

そして、さらに時間は経過し、日は傾き始め暗くなっていく。もうダメだ、帰ろう。

辺りを見渡し、元のいつも通る道に戻ろうとした。しかし、ここはどこだ？

どうも見知らぬ奥地まで来てしまったようだ。それから少し辺りをさ迷ったが、どう戻ればいいのかわからず焦りを感じ始めた。すっかり夜になっている。

携帯電話をポケットから取り出し、三塚に電話をしようとした。しかし、迷子になったから助けてくれなんて、恥ずかしくて言いたくない。また何か言われるかもしれない。いや、ここはそんな事気にしている場合じゃあ……。

悩んだ末、携帯電話を折りたたみポケットにしまった。大丈夫だ。すぐに戻れるさ。

それから、一時間程経ち急速に冷え始める。照明がないのでとても暗く、時々こけそうになった。

何やってるんだ。俺。一人で焦って、迷って……。

これ以上は生死に関わってくる。やはり、電話をかけるかと思った時、遠くの方で小さな明かりが見えた。

人だろうか？ どうしてこんな時間帯に？

どちらにせよ助かったと思った。急いでその明かりの元に駆け寄る。

「おい！」

俺は懐中電灯を持った人の近くまで行き、声をかけた。

「天道寺！」

それは三塚だった。制服ではなく、私服姿で眼を見開いている。

その横にはミノコがいて、俺を見つけると抱きついてきた。

「信也！」

そのせいで、ミノコの重さに負け、尻もちをつく俺。

「あんた馬鹿？ こんな時間まで何やってるの？」

「な…なんでもいいだろ」

「ミノコちゃんから寮に帰ってもあんたがいないって言つて。もしかして山で迷子になったんじゃないかと思つて捜したのよ！」

尻が冷たく感じ、ミノコを振り解いた俺は立ち上がった。

「迷子なのか？」

何も考えてなさそうな表情のミノコからそう言われると、言い様のない怒りがこみあげる。

「俺の事はどうでもいいだろ。誰も捜してくれなんて言つてねえよ」
その言葉を言つた後、乾いた音が響いた。左頬を三塚に叩かれたのだ。

「あんた最低ね」

怒りを抑えきれない表情の三塚。俺はしばらく放心状態だった。

「何でも言つてくれないの？ 一人で悩んで苦しんで馬鹿みたい」
しんと降る雨音だけが聞こえる中、三塚の声はよく響く。

「お前には関係ないだろ」

「関係なくない！ 友達でしょ！」

こいつの真剣な眼を見ると不思議と言いつ返す気力がなくなった。
なぜ？ と聞かれてもわからない。ただ、三塚はいい奴だと心の底から思つた。

「……ごめん」

言い様のない重苦しい空気が漂う。しばらく沈黙が続き、ミノコが「帰らないの?」と言った事がきっかけでようやく足が動き出す。俺と三塚の間に会話はなかった。

学生寮の自室に戻り、びしょびしょになった制服や靴下を投げてベッドに横たわる。

「信也。ご飯は?」

「いない」

「そうか」と小さく答えたミノコ。俺に気を遣っているような声色に聞こえた。一層惨めに思え、その後、三塚やこいつに迷惑をかけた事を悔いた。

それにしても、あいつがあんなに俺の事を心配してくれるなんて意外だ。

今日あった色々な出来事を思い出している中、精神的に疲れきっていた俺は自然と瞼が下がり、眠りについた。

次の日、昨日まで降っていた雨はやんでいた。三塚と山の入り口で会った時、どういう顔をしたらいいのかわからずにいると三塚は俺をちらつと見て「おはよう」と言ってきた。俺もなるべく自然に挨拶を返した。気まずい雰囲気が出る中、雨でぐちゃぐちゃになった山道を進んでいく。

「ねえ」

後を歩いていた三塚が口を開いた。

「あんた、サモナーになりたいのよね?」

突然の言葉に俺は立ち止まって振り返った。

「何で知ってるんだよ?」

「先生から聞いたの」

言うんじゃないかったと少し後悔した。

「ああ、そうだよ。笑うなよ」

「別に笑わないわよ。夢を持つのはいい事だと思うし」

こいつに似合わず気を遣っている。何か嫌な気分だ。

そこへ三塚の横にいたミノコが

「恵美は夢、ないのか？」

と彼女に問うと、戸惑った様子で

「私？ ……看護婦になりたいと思ってる」

小さな声で言った。

「看護婦？ お前が？」

俺はぷつと吹いた。想像すると似合わない。ショック療法と称して辞書で患者を殴る光景が浮かんだ。その様子を見た三塚はわなわなと肩を震わして顔を赤くする。

「笑うな！ あんただってサモナーとか笑えるし！」

「お前！ 別に笑わないとか言ってたか！？」

指差しながら突っ込む俺。

「うるさい馬鹿！」

ぷいっとなつぽを向く三塚。

やっぱりこうだよ。気を遣うなんてがらじゃない。

自然と笑いがこみ上げて、それを隠すように前を向き歩き始めた。

九話 【涙】（前書き）

ミノコを異界に戻すための道具を探す主人公達。五つの道具の内、二つを手に入れて、残り三つとなった。主人公はサモナーになりたという夢を持っており、それについて先生から指摘され、葛藤する毎日を送っていた。

そこに突如現れた転校生が波乱を起こす。

九話 【涙】

朝の朝礼で先生の横に転校生が立っていた。金髪美少女だ。可愛い人形のような顔をしているが、眼は意思の強そうな大きく丸い眼をしている。高貴で、男を寄せ付けぬ凛とした感じのお嬢様に見える。あのリボンは注意されないのか？ という程、髪の上に留めてある大きなピンクのリボンが目立つ。

黒板に「楠木 渚くすのぎ なぎは」と書かれている。自己紹介を促されると、美少女は教壇に立ち自信満々でこう言い放った。

「わたくしの名前はこの黒板の通りですわ。皆さんとはせっかくですので仲良くしてあげます。感謝しなさい」

この高飛車女との出会いが波乱の幕開けだった。楠木の席は一条の後の席、つまり俺の右後ろだ。彼女の父は有名なサモナーであり、卒業するとサモナー養成所という専用の施設に通い、そこで一流のサモナーを目指すようだ。その話には俺も一条も興味があった。

休み時間になると、一条が楠木に声をかけていた。もちろん話題は父親の事だ。

「もしかして君の父親ってあの有名なサモナー、楠木翔？」

「ええ。そうよ。それでわたくしが将来を有望視されている一人娘。本当はこんな所でくすぶっている時間が勿体無いのだけれど、お父様が若いうちは学校で勉強をしてなさいと言ってるさいの」

一条はその後聞いてもない事、主に自分の自慢話を長々と聞かされていた。まくし立てるように言いたかった事を言うと、手の甲に顎を寄せ、ふふんと上機嫌で少し腹が立つ顔をしている。

「あなたもサモナーに興味がありました？」

「まあ。多少は……」

「まさか、なりたいたか思ってるわけではないのでしょうか？」

「いや、まあ……」

俯く一条にほくそ笑む楠木。

「ホホホ。 そうでしょうね。 あなたのような一般人が慣れるほど甘くはないですわ。 夢を見る事は勝手ですけど、わたくしのような……」

なおも自慢話を言いかけた時、俺は机を叩いて楠木を睨んだ。

「お前、さつきから聞いてりゃあ……」

「あら野蛮な」

俺の方を向いて驚いた様子はなく逆に睨み返して、毒を吐く。

「野蛮だと！」

「わたくしはこの眼鏡の方のためを思っ言っているのよ。 無理なのは無理と言った方が本人のためですもの。 何をそんなに怒っているのか理解できませんわ。 まさか、あなたもサモナーになりたいとか言い出すのではないでしょうね？」

楠木は口元を手で押さえ、くすつと不快な笑いをする。

「何がおかしい？」

俺は立ち上がって楠木を上から睨んだ。 そこに委員長こと三塚が割って入る。

「ストップ！」

楠木は「ふん」と言いそっぽを向く。

本当にムカつく奴だ。 どういう教育をされてきたんだ。 親の顔を見たい。

「落ち着きなさいよ」

「……わかったよ」

三塚にそう言われて大人しく座ったが、夢を馬鹿にされた事にとっても腹が立った。

昼休みに入り、ミノコと一緒にパンを食っていた。 楠木は弁当を持って教室から出て行った。

「ミノコ、あいつ嫌い」

「俺もだ。 めずらしく意見があつたな」

ミノコと一緒にそんな陰口を言っていると隣の一条が、
「さっきの休み時間はありがとう」

と言ってきた。俺は気にするなと声をかけた。

一条は暗い奴で俺の苦手なタイプだと思っていたが、サモナーになりたいたいと思っている事がわかっただけで、仲間だと思えてくる。

授業が始まる直前に教室に戻ってきた楠木は退屈そうに席についた。後の席にいるミノコに気づいて舐める様に見ていたが、すぐに興味をなくしたのか、授業は無視して難しそうな本を読み始めた。その後の休み時間、彼女に話しかけてくる男子や女子がいたが、楠木は興味がないのか、素っ気なく答えていた。

何のために来たんだ。こいつは。

放課後、三塚は進路相談があるので、俺たちは玄関で待つことにした。

先に帰ってもいいけど、俺が進路相談した時も待ってくれたしな。ミノコは退屈そうに座りこみ、指で床のゴミを集めている。

「お前。汚いからやめろよ」

すぐに手を払ってゴミを落とした後、体育座りをしたミノコは俺を見上げた。

「信也。鬼ごっこしよう？」

「やらん。じつとしてろ」

「むー！」

ふくれた顔を見ると、そのまま俯き何も言わなくなった。

三塚はこういう時こいつをどうやってあやしているんだろうか？

「そこで何をしてますの？」

聞き覚えのある嫌な声が聞こえてきた。振り向くと楠木が一人立っていた。

「どうでもいいだろ。お前には関係ない事だ」

「そうですか」

そう言つと、何を思ったのか楠木はしゃがんでいるミノコの帽子

を取った。とたんに俺とミノコの視線が楠木に集まる。

「返せ！」

ミノコは楠木から帽子を奪い返すと、ふかぶかとかぶり直した。
「何で召喚獣がここににいるのかしらね？」

ミノコの角を見た彼女は大きく驚きもせず問い詰める様に言った。
嫌な奴に正体がばれてしまった。運がいいのか、他の生徒は見ていないようだ。

楠木はずいっと俺の所まで歩み寄ってきた。あまりに顔を近づけるので俺が身を引いたほどだ。

「あなたが原因？ 先生に言いつけてやろうかしら」

「勝手にしろ」

俺が慌てない事に不満を感じたのか、敵意満々に睨んできた。

「生意気な方ね」

「お前に言われたくない」

彼女は何を思ったのか表情を和らげ、くるっと向きを変えると、今度はミノコを見て、笑った。

「ふふ。本人に似て弱そうな召喚獣ね」

「信也の事を悪く言うな！」

ミノコは八重歯をのぞかせ、犬のように唸っている。

「さつきから何なんだお前は？ 用がないなら帰れよ」

「本来ならあなたの様な一般人に用はなかったのですが、今できましたわ。わたくしと勝負しませんか？」

何を言い出すんだこの性悪女は。

「勝負？」

「そうですね。わたくしも召喚獣を所有してますの。わたくしの様にサモナーとして将来を有望視されている人間は特別に召喚獣を持ち歩いてもいい事になっておりますのよ。そこで、どちらが強い決闘ですわ！」

「やなこった」

「あなたはサモナーを目指しているのでしょうか？ わたくしと戦っ

て実力を思い知った方が良いのではなくて？」

「お前なんかに負けてたまるか」

楠木はニツと笑った。

「決まりですわね。ここでは何ですので移動しましょう」

うまく乗せられた気がして、ちつと舌打ちをした。ここで引き下がるような悪口を機関銃の様に浴びせられるかわかったもんじゃない。ミノコがやる気はあるのはいい事だが。

しかし、移動と聞いて、どこに移動するつもりなんだ？ この学校の敷地内で召喚獣同士争うのは周りの目があり危険だ。前に一条の召喚獣と戦った時、あれだけうるさくドンパチやったもんだから、野次馬が集まってきてしまった。そういえば、あの後どうやって一条は彼らに説明したんだろうか？ まあ、今はそんな事どうでもいいんだが。

「ここです」

俺たちが向かった先は南棟の東に位置する格技場の中だった。畳の匂いがプンプンする。中には今、誰もいなかった。

「誰か来るんじゃないか？」

「じゃあ、鍵を閉めましょう。まあ、すぐ終わりますわ。わたくしとあなたの実力差は歴然ですから」

「抜かせ」

楠木は鍵を閉め、俺、ミノコと対峙するように畳の上上がった。「どこからでもよろしくてよ」

彼女は余裕の表情を見せ、馬鹿にした様に手の平を上にして手招きした。ミノコは帽子を取り、四つん這いになり、角を向けて威嚇している。

「召喚獣を出さないのか？」

「あら？ 忘れてましたわ」

こいつ、本当に舐めてるな。まあいいさ。後で惨めな醜態をさらす事になるんだからな。

「シヴァー！」

ポケットからサモンボールを投げてそう言うと、ボールは肌を透き通るようにまっ白い美女に変化した。水色の衣を羽織ってはいるものの、露出度が激しく、目のやり場に困った。

「それじゃあ行くぜ！ ミノコ！」

気を取り直し、ミノコに攻めの合図を送った。その瞬間高く跳ねあがり、シヴァとの距離を一気につめるとパンチを繰り出した。シヴァは避ける素振りも見せずにそのまま顔面にクリーンヒットし、よろめいた。ミノコは宙を舞い、距離を離して着地する。

「大口叩いてその程度か」

こいつは大した事はない。ミノコは、強い。

一条の召喚獣に勝った事で俺は少し自信を持っていた。

「なるほどね」

慌てる様子はない楠木は何かを高速で囁いた。その声は小さすぎて聞き取れない。

何を言っているんだ？ あいつは？

刹那、シヴァは口から冷気を吐きだした。その冷気は瞬時にミノコの足を氷漬けにする。両足が固まってしまい、身動きが取れない状態になってしまった。

「ミノコ！」

「接近戦が得意な相手に対し、足を封じる事は定石ですわ」

そして、また高速に口元を動かした。

俺は確信した。あれは合図だ！ 召喚獣に合図を送っているんだ！

「気をつける！ 何か仕掛けてくるぞ！」

「遅い」

ミノコが足の氷から抜け出そうとするが、先にシヴァが近づき、口から冷気を吐きだした。みるうちに顔以外の部分が氷漬けになる。

「う……あつ！」

ミノコの悲鳴が聞こえる。もう顔以外は動かす事ができない。少し前まで楽勝だと思っていたわずか数秒後に、こんな結果にな

るなんて……。こいつと俺の違い、それは感じていた。楠木は相手のタイプを冷静に判断し、的確な指示を召喚獣に送っている。おそらく、これが本来の戦闘の仕方なのかもしれない。そして、俺は指示を送るのでもなく、見ているだけ。…傍観者。……木偶の坊。

「まだ戦う気？」

憐れむような目で俺に言った。

これ以上戦っても無意味か。

「まだやれる！ まだミノコ頑張れる！ だから信也……」

必死で訴えかけるミノコが滑稽に見えた。その状態でどう戦えというのか。勝敗は決している。

「じゃあ命令しますわよ？ どうなっても知らないけど」

「待て！ 待ってくれ！」

俺はがつくりと肩を落とした。

彼女は強い。俺とは次元が違う。これがサモナーを本気で目指している奴の実力か。

「負け、ました」

「信也！」

「オーホッホッホ！！ しょうがないわね。許してあげますわ」

楠木の耳触りな高笑いが聞こえる。彼女はシヴァをボールに戻し、ポケットに入れた。その瞬間、ミノコの体を覆っていた氷が砕け、彼女は力なく倒れこむ。

「ミノコ！」

俺は急いで彼女の所へ駆け寄った。どうやら体が冷えてしばらく動けないようだ。楠木は俺に近づき見下ろしながらこう言った。

「サモナーになりたいなんて夢は捨てる事ね。はっきり言って迷惑ですわ」

彼女の言葉は俺の胸に深く突き刺さった。返す言葉は見当たらなかった。負け犬は何を言おうと遠吠えにしかない。

「ふん。言い返す事もできないのかしら？」

彼女は吐き捨てる様に言うと、入口に行つて鍵を開け、格技場か

ら出て行つた。しばらく俺は呆然とするしかなかった。

「大丈夫か？」

「うん。大丈夫」

俺の背中におぶられたミノコは元氣なく答えた。三塚は進路相談が終わり、先に帰つたらしく、こうして動けないミノコと一緒に山道を上っている。

二人でここを通るのは久しぶりだ。それにしてもこいつって意外と重いんだな……。

俺は動揺を隠すように、何か別の事を考えながら歩いていく。

「信也」

「何だ？」

「……ごめん。負けちゃった」

ぼつりと言つたその言葉は俺の動揺を誘うのに十分で、自分の心の弱さがこいつをこんな状態にしてしまったという気持ちが湧き起こつた。こいつは悪くない。悪いのはあんな誘いに乗つた俺なんだ。

「——馬鹿、野郎！」

口をぎゅっと噛みしめ、泣きそうになるのを必死に堪えた。なんでかな？ こいつにだけは泣き顔を見せたくなかった。いつもガキみたいだと思つていた。時にうつとうしく、時に頼もしく、いつも俺を守ってくれる。

でも、守られるだけじゃだめだ。俺もこいつを守つてやりたいんだ。だから、泣いている顔なんて見せられるか。見せてたまるかよ。

俺は早足で山道を進み、寮まで帰つた。

涙が溜まって、頬を伝い地面に落ちる前に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0901y/>

俺の僕はミノタウロス

2011年11月21日03時21分発行